

平成 22 年 10 月 28 日

報道関係各位

三井不動産株式会社
東京ミッドタウンマネジメント株式会社

次世代を担うアーティスト・デザイナーを発掘

「Tokyo Midtown Award 2010」結果発表

10月28日(木)～ プラザ B1F メトロアベニュー展示スペースにて展示

東京ミッドタウン(事業者代表 三井不動産株式会社)は、“「JAPAN VALUE(新しい日本の価値・感性・才能)」を創造・結集し、世界に発信し続ける街”をコンセプトに街づくりを進めています。その活動の一環として今年も開催中の「Tokyo Midtown Award 2010」において、この度計 1,711 点の応募作品の中から、グランプリ 2 作品を含む入選作品 12 点が決定しました。

<Tokyo Midtown Award 2010 グランプリ受賞作品>

アートコンペ
「JAPAN VALUE」～ガラスケースへの挑戦～



受賞作 : 『春夏秋冬東京動画絵巻』
受賞者 : きのした かく

デザインコンペ
「On the Green」



受賞作 : 『Tokyo Green Dictionary』
受賞者 : TRsN(とれせん)
(相馬 翔[そうま しょう]他 4 名)

今年で3回目となる本アワードは、<アートコンペ><デザインコンペ>の2部門を実施。2部門総計 1,711 点の応募作品の中から、アートコンペではアニメーション作品『春夏秋冬東京動画絵巻』、デザインコンペでは辞書をモチーフにしたビニールシート『Tokyo Green Dictionary』がグランプリに選出されました。

入賞作品 12 点は、10月28日(木)より約半年間(ただし一部期間を除く)、東京ミッドタウン プラザ B1F メトロアベニューにて展示され、11月2日(火)には授賞式を開催します。また、展示期間中には、来街者の一般投票で人気作品を選出する「東京ミッドタウン・オーディエンス賞」も実施。結果は11月4日(木)に展示会場および東京ミッドタウン・オフィシャルサイトにて発表いたします。なお、東京ミッドタウンでは10月28日(木)から11月3日(水)まで秋のデザインイベント「Tokyo Midtown DESIGN TOUCH 2010」を開催しておりますので、併せてお楽しみ下さい。

■掲載時の一般の方のお問い合わせ先■ 東京ミッドタウン・コールセンター TEL : 03-3475-3100

【本件取材に関する報道関係の方のお問い合わせ先】

東京ミッドタウン PR担当

金子、河村 TEL:03-3475-3141 / FAX:03-3475-3144 (東京ミッドタウンマネジメント株式会社)
島、三角(ミカド) TEL:03-4570-3167 / FAX:03-3486-3727 (株式会社プラップジャパン)
携帯:080-5887-1093

アートコンペ：「JAPAN VALUE」～ガラスケースへの挑戦～

アートコンペの今年のテーマは、「JAPAN VALUE」～ガラスケースへの挑戦～。多くの人がさまざまな目的で行き交う東京ミッドタウン内プラザ B1F メトロアベニューのガラスケースを舞台に、「JAPAN VALUE」を表現するアートを募集し、357 点の応募がありました。

さまざまなジャンルのユニークな作品から 4 点の入選作品を選出。入選者には制作補助金 100 万円が支給され、10 月 12 日(火)より作品の公開制作を実施。10 月 20 日(水)の最終審査を経て、各賞が決定しました。

グランプリ

受賞作：『春夏秋冬東京動画絵巻』

受賞者：きのした がく

略歴：2002 年 Central Saint Martin's College of
Art and Design(イギリス) 学士課程
グラフィックデザイン卒業
2004 年 Royal College of Art(イギリス)
修士課程アニメーション修了



<作家コメント>

4つの場面からなるアニメーション作品。現代日本における春夏秋冬の世相を表現しています。誰にでもある日常的なシーンを捉えた作品。しかし、どこかなつかしいような体験は、まるで時空を超えて存在する日本の原風景との出会いかもしれません。

【アートコンペ概要】

テーマ：「JAPAN VALUE」～ガラスケースへの挑戦～

応募期間：2010 年 6 月 1 日(火)～6 月 30 日(水)

審査方法：プレ審査→1 次審査(書類審査)→2 次審査(模型によるプレゼンテーション)→最終審査

審査員：児島やよい(フリーランス・キュレーター / ライター /

慶應義塾大学、明治学院大学 非常勤講師)

清水敏男(東京ミッドタウン・アートワークディレクター / 学習院女子大学教授)

土屋公雄(彫刻家 / 愛知県立芸術大学大学院教授)

中山ダイスケ(アーティスト / 東北芸術工科大学情報デザイン学科教授)

八谷和彦(メディア・アーティスト)

協力：TOSHIO SHIMIZU ART OFFICE

賞：グランプリ(1 点) _____ ¥1,000,000

(賞金) 準グランプリ(1 点) _____ ¥500,000

佳作(2 点) _____ ¥300,000

※別途制作補助金 100 万円を支給。

準グランプリ、佳作の作品については、添付参考資料をご参照ください。

デザインコンペ : 「On the Green」

デザインコンペの今年のテーマは、「On the Green」。都心の上質な日常を彩る、緑があるシーンで活躍するデザイン作品、1,354 点の応募がありました。

“デザイン力”、“提案(プレゼンテーション)力”、“テーマの理解力”、“消費者ニーズの理解力”、“商品化の可能性”を基準に応募シート(プレゼンテーションシート)を審査後、意匠権調査を経て、グランプリ・準グランプリ・佳作(各 1 点)、審査員特別賞(5 点)の計 8 作品が決定しました。

受賞作品には今年も継続的に商品化のサポートを行っていく予定です。

グランプリ

受賞作: Tokyo Green Dictionary

受賞者: TRsN(トレセン)

(相馬 翔[そうま しょう]他 4 名)

略 歴: 多摩美術大学造形表現学部デザイン科 3 年在籍



<作家コメント>

都内には、緑を楽しむための環境が限られている。その限られた環境は同じように見えるが違いがあり、それを私達は気づかずに過ごしてしまっていないだろうか？今回制作したシートは、都内の緑を場所ごとに分け、それぞれの緑の歴史や情報、生息している動植物などを辞書としてシートに載せた。本棚から一つの「緑の辞書」という知識を片手に緑で横になり、自然を体感することで私たちに上質なひと時を与えてくれる。

【デザインコンペ概要】

テ ー マ : 「On the Green」

応募期間 : 2010 年 8 月 2 日(月)~8 月 31 日(火)

審査方法 : 1 次審査→2 次審査→最終審査 ※全て応募シートの審査による

審 査 員 : 小山薫堂(放送作家 / 脚本家 / N35inc・(株)オレンジ・アンド・パートナーズ代表 /

東北芸術工科大学デザイン工学部企画構想学科長)

佐藤 卓(グラフィックデザイナー / 佐藤卓デザイン事務所 代表取締役)

柴田文江(インダストリアルデザイナー / Design Studio S 代表)

原 研哉(グラフィックデザイナー / 武蔵野美術大学教授 / 日本デザインセンター代表)

水野 学(アートディレクター / クリエイティブディレクター / good design company 代表)

協 力 : 東京ミッドタウン・デザインハブ

賞 : グランプリ(1 点) _____ ¥1,000,000

(賞 金) 準グランプリ(1 点) _____ ¥500,000

佳作(1 点) _____ ¥300,000

審査員特別賞(5 点) _____ ¥50,000

※受賞後、商品化のサポートを提供。

準グランプリ、佳作、審査員特別賞の作品については、添付参考資料をご参照ください。

東京ミッドタウン・オーディエンス賞

10月28日(木)～11月3日(水・祝)の展示期間中、来街者の一般投票で「東京ミッドタウン・オーディエンス賞」を決定します。投票いただいた方の中から抽選で10名様に、2008年デザインコンペにて水野学賞に輝き、商品化された“富士山グラス”をプレゼント。受賞作品は、11月4日(木)に発表いたします。

受付期間 : 10月28日(木)～11月3日(水・祝)
投票場所 : プラザ B1F メトロアベニュー展示スペース



※アートコンペ、デザインコンペの各受賞作品画像は、以下の URL よりダウンロードいただけます。
http://www.tokyo-midtown.com/press/index_press.html

Tokyo Midtown Award 2010 受賞作品

アートコンペ : 「JAPAN VALUE」～ガラスケースへの挑戦～

■グランプリ

受賞作:『春夏秋冬東京動画絵巻』

受賞者:きのした がく

略 歴:2002年 Central Saint Martin's College of
Art and Design(イギリス) 学士課程
グラフィックデザイン卒業

2004年 Royal College of Art(イギリス)
修士課程アニメーション修了

<作家コメント>

4つの場面からなるアニメーション作品。現代日本における春夏秋冬の世相が表現されています。誰にでもある日常的なシーンを捉えた作品。しかしどこかなつかしいような体験は、まるで時空を超えて存在する日本の原風景との出会いかもしれません。



■準グランプリ

受賞作:『あのなる木』

受賞者:牧野 永美子(まきの えみこ)

山崎 裕治(やまさき ゆうじ)

略 歴:

牧野 永美子 2010年 多摩美術大学美術学部 工芸学科卒業

山崎 裕治 2010年 多摩美術大学美術学部 工芸学科卒業

2010年 同大学院 美術研究科
工芸専攻金属研究領域 在籍

<作家コメント>

彫刻によるインスタレーション作品。目の前に飛び込んでくるのは大きな“あ”のなる木です。その足元には愛くるしい羊の群れが列をなして歩いてゆきます。“あ”のなる木とは「あっ」という閃きの瞬間を表しています。「“あ”のなる瞬間の感動を道行く人々とも共有できたら」という作者の意図が込められています。



■佳作

受賞作:『es.kei.wai』

受賞者:石山 和広(いしやま かずひろ)

略 歴:2005年 武蔵野美術大学建築学科卒業

2008年 東京芸術大学大学院
先端表現専攻修了

<作家コメント>

肉眼では決して捉える事のない空のイメージが目の前に広がります。目の前に広がる空が別のものに見えた瞬間、空が特別な存在となるでしょう。



■佳作

受賞作:『その先にあるもの』

受賞者:井口 雄介(いぐち ゆうすけ)

略 歴:武蔵野美術大学大学院

博士後期課程 在籍

<作家コメント>

ガラスケースの中に浮かび上がった虹色の光の輪。鑑賞者の見る位置によってその表情を変化させ、思わず立ち止まってしまう。



<アートコンペ審査員総評>



児島やよい(フリーランス・キュレーター / ライター /

慶應義塾大学、明治学院大学非常勤講師)

昨年にも増してレベルが高く、表現メディアも多様になり、楽しい審査だった。が、ガラスケース、通路、という条件はやはり厳しく、そこへの挑戦は容易ではないことも、審査の難しさとともに再認識させられた。最終審査の4作品は、映像と、モノとしての力との対比が興味深い展開となった。全体に、インスタレーションの意識や技術をもっと高めて欲しいところだが、結果的には、自分の良さをのびのびと発揮できた作品が、力を得ている。



清水敏男(東京ミッドタウン・アートワークディレクター / 学習院女子大学教授)

本年のアワードは応募用紙を見ただけで、かなりレベルが高くなったことを実感した。継続は力である。多くの応募者のなかから絞り込み、プレゼンテーションをへて展示にいたった各作品は、どれも意欲的で、若いアーティストを支援するアワードの趣旨にそったものとなった。人通りの多いなかでどれだけ視線をひきつけられるかというのが「ガラスケースへの挑戦」であり、そしておおむね成功している。来年以降も大きな期待を寄せたい。



土屋公雄(彫刻家 / 愛知県立芸術大学大学院教授)

2010年ミッドタウンアワードへの応募総数は357点、そこから10点が一次審査を通過、その中から4作品が二次審査で絞り込まれた。すでに一次審査に残った作品群は、それぞれが独自の世界観を持つ甲乙付け難い作品であり、このことは公開審査においても明白であったと思う。さらに今回の入選作品は、映像、彫刻インスタレーション、アニメーション、メディアアートと表現がバラエティーに富んでおり、プラザ地下通路を行き交うギャラリーには、現代アートを多様に楽しんでもいただけることだろう。



中山ダイスケ(アーティスト / 東北芸術工科大学情報デザイン学科教授)

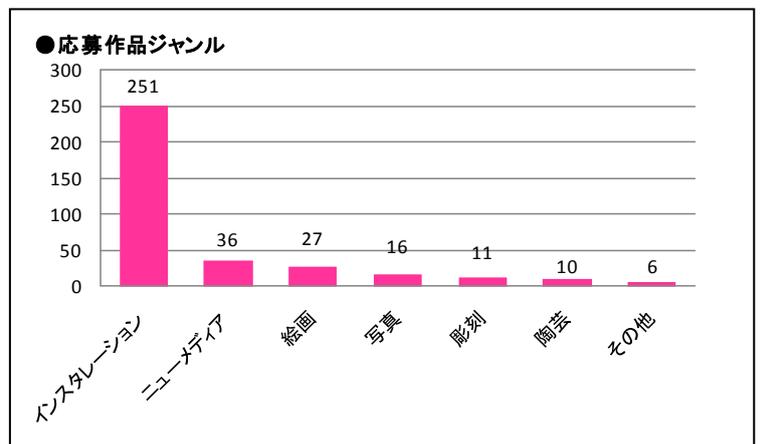
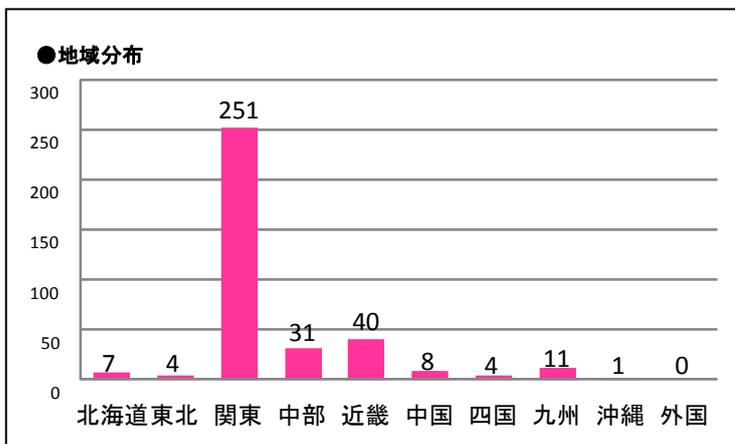
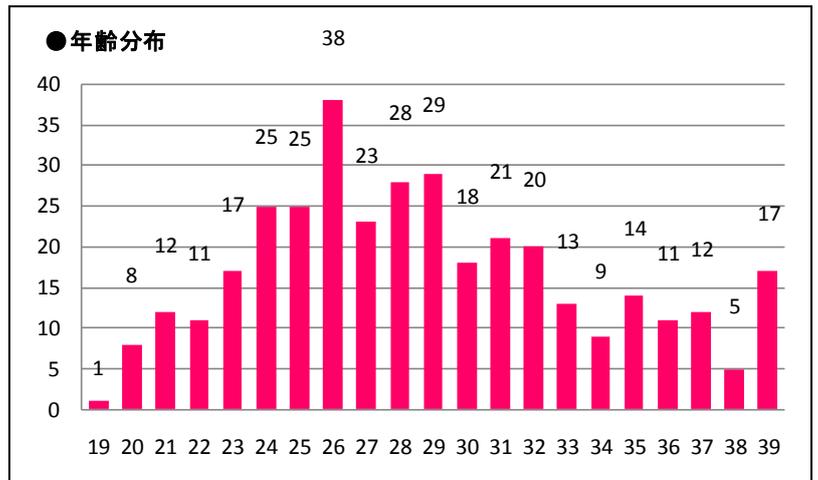
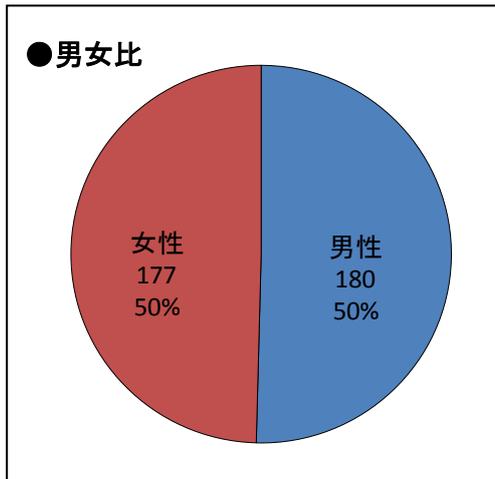
今年は映像作品2点と、光を使ったインスタレーション、立体作品というラインナップでしたが、それぞれの展示ケースから発せられる声も様々でした。グランプリのきのしたさんの作品は巧みに構成された四枚の季節の東京が小ぶりのモニターに映し出されています。決して大声の表現ではありませんが、かえって素朴な味を生み出していました。準グランプリの牧野さんの羊たちとともに、今の日本に大切な気づきをもたらしてくれた入賞作でした。



八谷和彦(メディア・アーティスト)

今回は三回目にしてはじめてアニメーション作品がグランプリを受賞した。実は、インスタレーションとしての完成度などについて審査委員の間で議論があったのだが、今回は完成度よりは作家の姿勢や内容、可能性を重視する、という方向で決着した。ともあれ、厳しい条件の中、チャレンジな作品に挑戦し、きちんと完成させた4組の入賞作家に対しては、最大限の感謝を捧げたい。本当にご苦労さまでした。ありがとうございます。あなたたちの作品が多くの観客の心に届きます様に。

<アートコンペ 応募者データ>



■応募者数…357名(組)

■平均年齢…28.8歳

※応募対象年齢(39歳以下)以外を除く

■グランプリ

受賞作:『Tokyo Green Dictionary』

受賞者:TRsN(トレセン)(相馬 翔[そうま しょう]他4名)

略歴:多摩美術大学造形表現学部デザイン科3年 在籍

<作品コンセプト>

都内の緑を場所ごとに分け、それぞれの緑の歴史や情報、生息している動植物などを辞書としてまとめたシート。本棚から一つの「緑の辞書」という知識を片手に緑で横になり、自然を体感することで私たちに上質なひと時を与えてくれる。



■準グランプリ

受賞作:『パラシュートカメラ』

受賞者:齊藤 秀幸(さいとう ひでゆき)

略歴:2005年多摩美術大学プロダクトデザイン専攻卒業
(株)岡村製作所 在籍

<作品コンセプト>

公園や広場で使う、パラシュートの付いたカメラ。思いっきり空に投げられたパラシュートカメラは、ゆらゆらと降りてくるあいだにシャッターを切り続けます。今までにない上空からの記念写真は、撮る行為も含めて、とても楽しい思い出になるはずです。



■佳作

受賞作:『Looking For The Happiness』

受賞者:眞宮 啓(まみや ひろし)

略歴:北海道出身。大学卒業後上京し、システムエンジニアとして勤務

<作品コンセプト>

コンピュータ技術の導入が遅れている分野の一つである「幸せ探し」に最新技術を導入してみました。子供の頃、誰もがやったことがある「四葉探し」をサポートするツールです。



<審査員特別賞>

■小山薫堂賞

受賞作:『dissue』

受賞者:谷口 友里歌(たにぐち ゆりか)

略歴:京都造形芸術大学情報デザイン科
コミュニケーションデザインコース3年 在籍

<作品コンセプト>

tissue? dish?ティッシュをお皿代わりに使うという日常の行為から発想したティッシュのお皿です。お皿として使用した後は口をふいたり食べかすを拾ったりと一枚で二つの役割をこなすので食事の一連の行為を無駄なく行うことができます。ティッシュのお皿でお手軽ピクニック。



■佐藤 卓賞

受賞作:『RING SHEET』

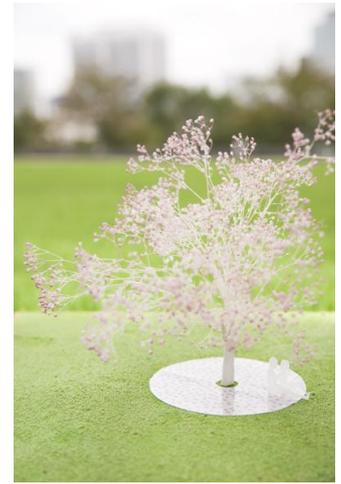
受賞者:ninkimono!(ニンキモノ!)

(今津 康夫[いまづ やすお]、菅野 亘[すがの わたる])

略 歴:ninkipen!一級建築士事務所 在籍

<作品コンセプト>

樹の幹をぐるっと取り囲んで敷くことができるレジャーシートです。太陽に合わせて自分も場所を変えましょう。樹の幹とシートと中心を重ねることによって、自然とより一体感を得ることができるはずです。



■柴田文江賞

受賞作:『ムシホテル』

受賞者:津田井 美香(つたい みか)

略 歴:京都工芸繊維大学 4 回生 在籍

<作品コンセプト>

虫カゴは捉えた虫を閉じ込めるための箱でしたが、捕らえた虫を愛でるための虫カゴを考えました。インテリアを奇麗に配置して、捕らえた虫に素敵な空間を用意してホテルの様におもてなしする。大人や女の子が昆虫採集に出かけるキッカケになるのではないのでしょうか。



■原 研哉賞

受賞作:『大の字シート』

受賞者:安田 直樹(やすだ なおき)

略 歴:1997 年 大阪工業大学工学部建築学科卒業
建築・インテリア・プロダクトデザイン事務所勤務を経て
「nYd」として活動

<作品コンセプト>

芝生の上に大の字に寝転ぶのは気持ちがいいものです。レジャーシートを大の字にすることで心置きなく大の字で寝転ぶことが出来ます。たくさんの方がこのシートを使用することにより、あたかも芝生に花が咲いていくようです。



■水野 学賞

受賞作:『HAPPLE』

受賞者:余川 郁(よかわ かおる)

略 歴:都立工芸高校 インテリア科 3 年 在籍

<作品コンセプト>

HAPPLE-HAPPY×APPLE-はりんごの形をした音楽プレイヤーです。ただりんごの形をしているだけでなく、りんごのように枝にぶら下げて使います。緑の中ならではの音楽の楽しみ方を提供します。ピクニックなどの外へのお出かけのおともに、お弁当と一緒に持って行きませんか？楽しく素敵な時間を演出してくれるはずです。



<デザインコンペ審査員総評>



Photo by masato indo

小山薫堂(放送作家 / 脚本家 / N35inc・(株)オレンジ・アンド・パートナーズ代表 / 東北芸術工科大学デザイン工学部企画構想学科長)

1,354 点にも及ぶ作品を審査することは、想像以上のハードワーク…なはずなのですが、今年もまた非常に楽しい時間を過ごさせていただきました。とはいえ、審査する側も人間ですから、いい作品をついつい見落としてしまうこともあります。こういう応募作品の多いコンペで最も重要なこと、それは「分かりやすく伝えること」だと思います。そのためには、欲張らないこと。欲張りすぎてたくさん伝えようとするほど、相手の目にはつまらなく映ってしまうものです。見た瞬間に「素敵な何か」が感覚として分かる…結局、最後まで残ったのはそういう作品だったと思います。それにしても、これほど審査していて楽しいデザインコンペはない！応募してくださった全ての方に感謝しています。



佐藤 卓(グラフィックデザイナー / 佐藤卓デザイン事務所 代表取締役)

On the Green というテーマを、まずどのように解釈するのか。このアワードのデザイン部門は、実際に製品にすることを前提にしているの、面白い視点だけでなく、技術面・コスト面・売れるかどうかというマーケティング面という厳しい実現可能ラインとどう折り合いを付けたギリギリの線を提示してくれるのかという期待と共に審査当日を迎えました。審査をしてみただけで思ったのは、似たような提案が多かったということです。このようなアワードに作品を発表する場合は、他の人でも思いつくことかもしれないという厳しい目が必要です。誰も思いついていないアイデアに辿り着くには、多くのアイデアを次から次に出すということだろうと思います。その中から、より革新的なものを選ぶという姿勢が大切だと思います。



Photographs by:殿村誠士

柴田文江(インダストリアルデザイナー / Design Studio S 代表)

テーマの「On the Green」に対して、ほとんどの応募者が都会の中の「仕立てられた緑」をイメージしていたのだろうか、同じアイデアや提案が驚くほど数多く重なったことが今年の特徴だ。提案には見る者の納得を引き寄せる力が必要で、誰もが共感できそうなことでありながら、ユニークな回答を探すことの難しさを考えさせられた。デザインは詩に似ているかもしれない。無意識を言語化するように、それは誰も心の中心にある典型でありながら、表に出すことが難しい。独りよがりにならずに、深掘したテーマをわかりやすくシンプルに表すこと。高い評価を得た作品には、共通してそれが感じられた。



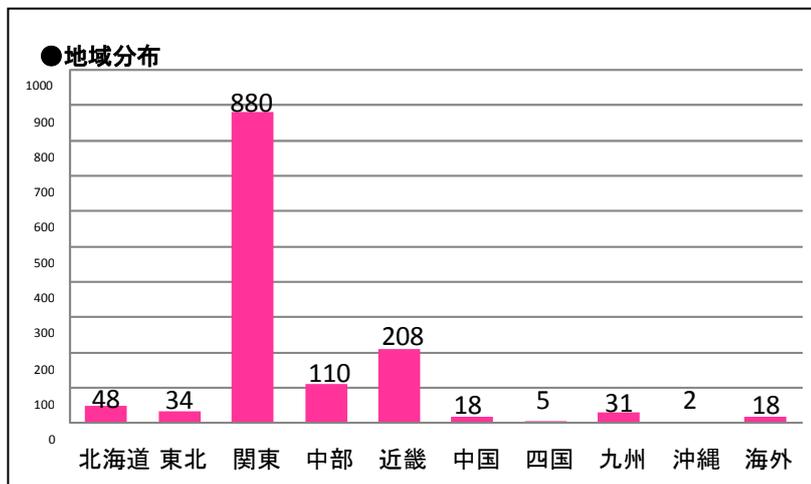
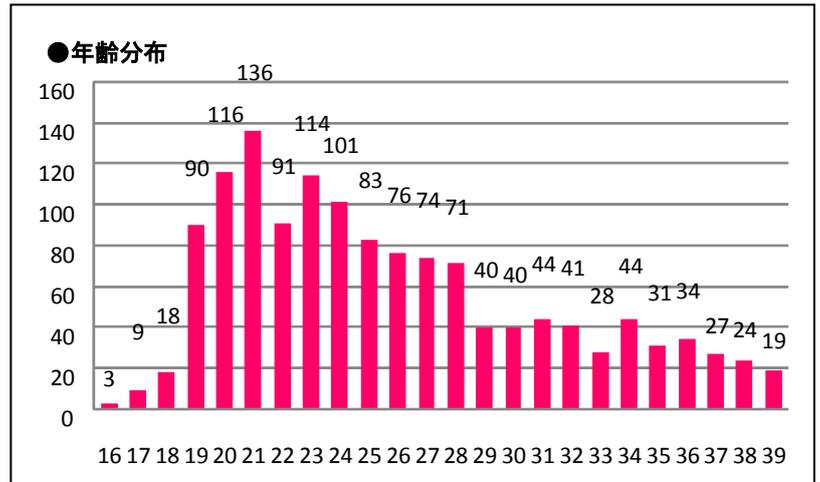
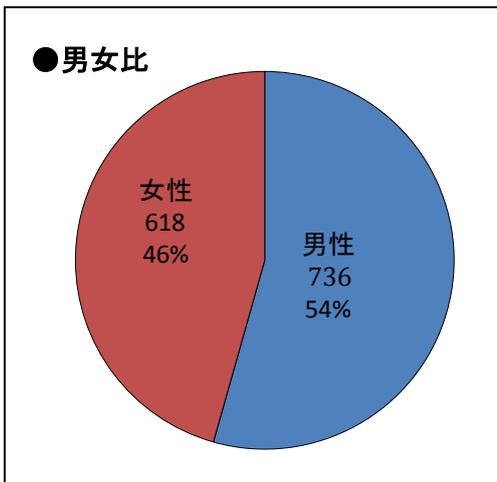
原 研哉(グラフィックデザイナー / 武蔵野美術大学教授 / 日本デザインセンター代表)
「オン・ザ・グリーン」というテーマを、どうダイナミックにとらえるかという点で、面白い作品が多かった。新しい視点を探しつつも、商品として活躍できそうなイキの良いアイデアがそろって受賞したと思う。気持ちの良い審査だった。



Photo by Eiki Mori

水野 学(アートディレクター / クリエイティブディレクター / good design company 代表)
Tokyo Midtown Award の審査員は、今年で3度目です。第1回と第2回はいずれも「日本」がテーマ。今回は前回までと違うテーマだったこともあり、審査前からとても楽しみにしておりました。審査では、想像以上に多種多様な作品に応募されており、楽しく審査することができました。これら 1,354 点の作品は、発案者の頭の中で最低でも 1,354 回「On the Green」を考えたこととなります。それだけ多くの方々々が緑と自分を考えたことに、このコンペティションの意義を感じます。チャリティーやエコは、着地点が難しい。一方向から見ってしまうと、どこかで破綻が生じやすくなります。人と人、自然と人、自然と自然がどうシナジーして行くのか、行くべきなのかを考えさせられると同時に、未来が少し楽しくなりました。ありがとうございました。

<デザインコンペ応募者データ>



■応募者数…1,354 名(組)

■平均年齢…25.8 歳

※応募対象年齢(39 歳以下)以外を除く